経済および経済学の本義について(中篇)
——経済学批判の存在理由とその展開——

山　本　二　三　丸

まえがき
一　「経済」の語義
二　「経済学」の意味内容
(1)　福田徳三氏の解説
(2)　古典学派経済学の体系
(a)　アダム・スミス
(b)　デイヴィッド・リカードゥ
(c)　古典学派経済学の変質と俗流化……
(以上，第42巻第3号所載)
三　マルクス＝エンゲルスによる「経済学批判」
(1)　エンゲルスによる批判
(2)　マルクスにおける「経済学批判」
(a)　著作「経済学批判」体系の成り立ち
(b)　「経済学の体系」にたいして
(c)　「三位一体的定式」にたいして……
(以上，本号所載)
四　科学的経済学の骨格……(以下，次号掲載予定)
五　貨幣物神の支配と奴隷化
六　「経済学批判」の新たな展開の必然性
簡単な要約
あとがき

三　マルクス＝エンゲルスによる「経済学批判」

(1)　エンゲルスによる批判

古典学派経済学にたいする「経済学批判」は，いうまでもなくマルクスによって大成されたものであるが，ここにマルクスに先立ってエンゲルスの労作をとりあげたのは，その労作がきわめてはやく著わされていることと，その批判の内容がきわめて的確で鋭いものでありながらまだ見取り図の程度を出ないいわば下書きにとどまっているという点を考慮したためである。エンゲルスの労作は，『国民経済学批判大綱』(Umrisse zu einer Kritik der Nationalökonomie) と題され，マルクスとアーノルド・ルーゲ(Arnold Ruge) との編集によってパリで出版された『独仏年誌』(Deutsche-Französischen Jahrbücher) に1844年発表されたものである。この労作の題名は一般に右に記したように『国民経済学批判大綱』と訳されており，私も一応それにしたがったのであるが，しかしこの「大綱」という訳語は，いささか妥当を欠き誤解を招く恐れもあるのである。原語の Umriβ は，auβere Grenzlinie ということ，つまり輪廓を意味するものでしかないのに，日本語の「大綱」は「ある事柄のうちの根本的な所」を意味するものであって，両者のあいだにはかなりの隔たりがあるのである。それは，本来の「大綱」を示したものではなく，国民経済学の批判のための下書きにすぎないのであって，このことは，この労作が，横線で区切られただけの15の段落を綴り合わせたにすぎないもので，そのすべて

の段落には表題も見出しもつけられていないという体裁となっていることを見れば，よくわかるはずである。

しかし，たんなる「輪廓」を示したものとはいえ，そこに示されている批判内容は，きわめて的確であると同時に奥深いものがあり，国民経済学のいわば致命的欠陥をその根底から抉りだしているものであることは争えない事実であって，このことは，盟友マルクスが後年，1859年に著わした『経済学批判』(Zur Kritik der Politischen Oekonomie) の「序言」のなかでエンゲルスのこの労作にたいして，「経済学的諸範疇の批判のための彼の天才的な概説[7]」(傍点—山本) というきわめて高い評価を与えているという事実によっても，裏書きされているといえるのである。

さきにも述べたように，エンゲルスのこの労作は「天才的」(genial) ではあるが，「見取り図」(Skizze)にすぎないものであって，その叙述内容も論理的に整ったものではなく，横線で簡単に仕切られただけの15の各段落が取り扱っている主題もさまざまである。そのうえ，その批判の仕方も，古典学派経済学者の主張のいわば弱点をつくという形で断続的であり，その意味内容を十分わかりやすい形で展開するという方法をとっていない。そのため，これら15の段落の批判内容すべてを説明しつくすためには，かなりの紙数が必要であるばかりでなく，また統一的な理解を導き出すことはけっして容易なことではないと思われる。私としては，古典学派経済学の主張にたいして，どういう点を，どのように批判しているか，それらの主張の致命的欠陥はどういう点にあるかということ，さらに，それらの誤った主張にたいして，エンゲルス自身はどのような考え方なり方法なりを呈示しているか，古典学派経済学者とエンゲルスとの主張の対立の根底にあるのはどういうことか，ということを確認することができるならば，

7）マルクスは，右の「序言」のなかで，彼自身の「経済学研究の歩み」について簡単に述べたあと，「私の研究の到達した結果」を明らかにし，「私にとって明らかとなった，そしてひとたび自分のものとなってからは私の研究にとって導きの糸として役だった一般的結論は簡単にいえば次のように定式化することができる」と述べて，以下にいわゆる「唯物史観の定式」なるものを詳しく展開しているのであるが，これにつづくパラグラフでははやくもエンゲルスの名前をあげて，つぎのように説明している。

「私は，フリードリヒ・エンゲルスとは，経済学的諸範疇の批判のための彼の天才的な概説が(『独仏年誌』に）現われて以来，たえず手紙で考えをとりかわしつづけてきたが，彼は別の道筋を経て(彼の『イギリスにおける労働者階級の状態』を参照せよ）私と同じ結果に到達していた」(Marx-Engels Werke, Bd. 13. S. 10. 邦訳大月版，第13巻，7ページ)。

エンゲルスの名著『イギリスにおける労働者階級の状態』は，1842年から1844年にかけて約2カ年にわたるイギリス滞在を通じての周到な調査研究の成果として，1845年，「イギリスの労働者階級に寄せる」ものとして出版されたものであり，また彼の『国民経済学批判大綱』は1844年はじめに発表されている。それゆえ，マルクスの指摘しているように，エンゲルスは，その当時すでに唯物史観の基本は自分のものとしてつかんでおり，その把握しえた基本をただしく適用して「天才的な」労作，『国民経済学批判大綱』を書いたものと考えることができるのである。

右の労作の内容をほぼ理解しえたものといえるのではないかと考えるので，15の段落のうちから適当な段落をいくつか選び出して，これらの段落の内容について，右にあげたような点を明らかにするよう，拙い説明をこころみることにしたいと思う。

(i) 最初の段落の冒頭にかかげられているのは，つぎのような叙述である。

「国民経済学は，商業が拡大した自然の結果として生まれた。それとともに，単純で非科学的な暴利商業に代わって，公然と許された詐欺の完成した体系，すなわち完結した致富学があらわれた」(Marx-Engels Werke, Bd. I. S.499. 邦訳大月版，第1巻，54ページ。以下で出典を示さずにただS.および訳とのみ記してあるのは，すべてこの二つの出典の個所を指すものである)。

ここには，国民経済学が商業の拡大，外国貿易の発展にともなって必然的に生まれたものだということが指摘されており，それと同時に，国民経済学は「完結した致富学」だと規定されている。この致富学(Bereicherungswissenschaft)という規定は，甚だ注目すべきものであって，その深い意味は，つぎに引用する第2番目の段落の叙述内容と読み合わすことによって，正しく理解されるのである。

「国富という表現は，自由主義的経済学者たちの概括欲のおかげではじめて現われたものである。私的所有の存在しているかぎり，この表現はなんの意味ももたない。イギリス人の「国富」はきわめて大きいが，それにもかかわらず彼らは世界でもっとも貧しい国民である。この表現はすっかり捨ててしまうか，でなければこれに意味をあたえるような前提を認めるかしなければならない。国民経済学(Nationalökonomie)，政治経済学，公共経済学(politische, öffentliche Ökonomie)という表現も同様である。現状のもとでは，この科学は私経済学(Privatökonomie)と呼ばれるべきである。なぜなら，ここでは社会的関係は私的所有のために存在しているにすぎないからである[8)]」(S. 502-503. 訳546-547ページ，ゴシック体―エンゲルス，傍点―山本)。

さきにかかげた冒頭のパラグラフにつづいて，エンゲルスは，致富学の代表として重商主義経済学と自由主義経済学とをあげ，両者を比較して，前者にくらべて後者はどういう意味で「一歩前進」といえるかという点に注意を向け，「自由貿易の擁護者は重商主義者自身よりも悪い独占論者」であり，「新経済学者の偽善的な人間性のうしろには旧経済学者には全く見られなかった野蛮がひそんでいること，旧経済学者の概念の混乱は攻撃者の二枚舌的な論理にくらべるとまだしも単純で首尾一貫していること」を指摘したのち，自由主義的経済学，つまり

8）私的所有の存続するかぎり，国富とか，国民経済学とか，政治経済学とか，公共経済学とかいうもっともらしい表現がおよそ無意味なものであるばかりか，すすんでは私的所有の実態と資本の専制支配を隠蔽し「合理化」してやまないものだということほど，単純・明確なことはない。ところが，それから1世紀余りもたって独占・金融資本の完璧な支配体制下にあるこの国では，「政治経済学」という言葉を得得とふりまわしたり，「公共経済学」を一段とおしひろげて「民主的地方財政」などというまやかしの「術語」をあやつったりする自称「マルクス経済学者」があとを絶たないのである。

古典学派経済学の成しとげた「進歩」についてこう説明している。

「自由主義的経済学の成しとげた唯一の積極的な進歩は，**私的所有の諸法則**を展開したことである。これらの法則は，まだ最後の帰結に達するまでは展開されず，はっきり述べられはしなかったとはいえ，たしかに自由主義的経済学のなかにふくまれている。そこで，富裕になるもっとも手近な方法の決定が問題になるあらゆる点では，したがってすべての厳密に経済学的な論争では，自由貿易の擁護者のほうが正しいことになる。いうまでもなく，これは，独占論者と論争する場合のことであって，私的所有の友対者と論争する場合のことではない。なぜなら，**イギリスの社会主義者**がずっと以前に実践的にも理論的にも証明しているように，私的所有の反対者は経済上の諸問題を経済学的にもいっそう正しく解決することができたからである（S. 501-502. 訳543-544ページ，傍点―エンゲルス，ゴシック体―山本）。

「イギリスの社会主義者」とは，おそらくロバート・オーエン（Robert Owen）を指していると考えられるが，エンゲルス自身はその理論と実践を学びとり，さらにこれを発展させて唯物史観の基本を自分のものとしていること，その明確な立場に則して古典学派経済学の批判に当らなければならないものだということが，右の行間によくうかがわれるのである。

この最初の段落の結びとして，批判の眼目が，つぎのように明示されていることを指摘しておく必要がある。

「そこで，国民経済学を批判するさいには，われわれは基本的諸カテゴリーを研究し，自由貿易説によってもちこまれた矛盾を暴露し，この矛盾の両側面から生じる結論を引きだすであろう」（S. 502. 訳546ページ）。

(ii)　第3番目の段落においては，まず，「私的所有の最初の結果」としての商業がとりあげられて，その本質は「合法的な詐欺」にほかならないことが明らかにされ，重商主義は商業の不道徳な本質をすこしも隠さなかったが，スミスになると，事態の変化に応じて，「人間性」が商業の本質をなすものだという偽善が支配するものとなったことが説明され，この偽善の論理に手きびしい批判が加えられている。その批判の一部をつぎにかかげてみよう（……は省略部分）。

「……もちろん，自分が安く買い入れる人にたいして，，また自分が高く売りつける人にたいして愛想よくふるまうことは，商人の利益になることである。だから，ある国民がその仕入先や取引先に自分にたいする敵意を抱かせることは，きわめて愚かな行動なのである。友誼的であればあるほど有利である。これが，商業の人間性というものであり，道徳を不道徳的な目的に悪用するこの偽善的なやり方が，自由貿易制度の誇りなのである。……君は地球の隅々まで文明化したが，それは君たちのいやしい貪欲をくりひろげる新天地を手にいれるためのものであった。君たちは諸国民を親睦させたが，それは泥棒の親睦のためであった。そして戦争を少なくさせたが，それは平和なときにそれだけ多く儲けるためであり，競争という不名誉な戦いを極端にまでおしすすめるためであった[9]……」（S. 504. 訳548ページ）。

しかしエンゲルスは，商業の人間性＝道徳性を主張する自由主義的経済学をきびしく批判するだけにとどまることなく，さらに，それが有する歴史的な意義を明確にしているのであって，この点に彼の批判の真価が存することを私たちはつかまなければならない。彼は，つぎの真理を強調しているのである。すなわち，自由主義的経済学は，一方において「国民性を解消し敵対関係を普遍的なものにして，人類を，各自，他のすべての者と同じ利害をもっているというまさにその理由で共食いする猛獣の群に転化させる」（S. 504-505. 訳548ページ，傍点―エンゲルス）ことにつとめたと同時に，他方において，「それ独特のりっぱな発明品」である工場制度によって家族の解体をおしすすめることにより，彼ら自身，「人類の一般的な進歩の鎖の一環をなす」ものであり，「人類の自然との宥和および自分自身との宥和という大転換の道をひらいているにすぎない[10]」（S. 505. 訳549ページ）ということである。

(iii) 第4番目の段落では，「価値」という範疇がとりあげられている。まず，古典学派経済学者が「二重の価値」を，つまり「抽象的なまたは真実の価値」と交換価値とをもっていること，イギリスのマカロック（John Ramsay MacCulloch）とリカードゥは物の抽象的価値は生産費によって規定されると主張し，フランスのセイ（Jean Baptiste Say）は物の真実価値はその効用（Brauchbarkeit）によってはかられると主張して，両者の間にはてしない論争がかわされたことについて，エンゲルスは，これら二つの主張がいずれもそれ自身のうちに解決しがたい矛盾をもっていることを明快に暴露してその根本的誤謬を――つぎのように――明らかにしているのである。

まずイギリス経済学者の主張について（……は省略部分）。

「なぜ生産費は価値の尺度なのか？　なぜなら，普通の状態のもとでは，そして競争関係を度外視すれば，だれもある物を，その生産に要した費用以下で売りはしないだろうから，と。――売りはしないだろうだって？　商業価値を問題にしていないこの場合に，われわれに「売ること」がなんの関係があるのか？　われわれがまさに論外にするべき商業を，すぐにまた問題にしているではないか。……。

9）ここのくだりは，第二次大戦後の世界の発達した資本主義諸国の対外政策の一面を，なんと，みごとに言いあてていることであろうか。

10）エンゲルスのこの労作発表後23年ののちに公刊されたマルクスの主著『資本論』第1巻の第13章「機械と大工業」の中には，工場制度による家族の解体の歴史的意義がつぎのように明確に解明されている。

「……資本主義体制のなかでの古い家族制度の崩壊がどんなに恐ろしくいとわしく見えようとも，大工業は，家事の領域のかなたにある社会的に組織された生産過程で婦人や男女の少年や子供に決定的な役割を割り当てることによって，家族や両性関係のより高い形態のための新しい経済的基礎をつくりだすのである」（Marx-Engels Werke, Bd. 23. S. 514 邦訳大月版，637ページ）。

エンゲルスのこの労作にたいしてマルクスが呈した「天才的な概説」という讃辞の含蓄する意味はなかなか奥深いものがあるといわなければならないであろう。

さらに！　万事経済学者の言うとおりであるとしばらくみとめよう。かりに，ある人が絶大な努力と莫大な費用とをかけて，なんの役にもたたないもの，だれも欲しがらないものをつくったとしよう。そういうものもまた生産費だけの価値があるだろうか？　全然ない。だれがそれを買いたがるだろうか，と経済学者は言う。だからわれわれは不評判のセイの効用ばかりでなく，さらに――「買う」こととともに――競争関係をも同時にあわせもつことになる。これは不可能なことである。すなわち経済学者は自分の抽象を一瞬間も維持していくことができないのである。……」(S. 506. 訳550ページ)。

つぎにセイについて。

「セイにうつると，われわれは同じ抽象を見いだす。物の効用はある純主観的なもの，絶対的な形で規定することのできないものである――もちろん，少なくとも人々がまだ対立関係のなかをさまよっているあいだは，規定できないものである。この理論によれば，必要品は奢侈品よりも大きな価値をもっているはずであろう。物の効用の大小についてある程度客観的で，外見上一般的な決定に達するただ一つ可能な方法は，私的所有の支配のもとでは競争関係である。ところがこの競争関係がまさに度外視されねばならないのである。だが競争関係が認められると，生産費もまた入りこんでくる。なぜならだれも自分が生産のさいにつぎこんだもの以下で売りはしないからである。したがって，この場合にもまた，対立関係の一方が，心ならずも他方に移行する」(S. 506-507. 訳550-551ページ，傍点―エンゲルス)。

相反する二つの主張の錯誤を明らかにしたところで，エンゲルスは，「この混乱を解明してみよう」と述べて，つぎのように説明している。

「物の価値は両要素をふくんでいるのに，これらの要素は，論争の当事者によってむりやりに分離され，しかもわれわれが見たように，それが不成功に終わっているのである。価値とは，生産費と効用との関係である。価値の最初の適用は，ある物を総じて生産すべきかどうか，すなわち，その物の効用は生産費を償うかどうかという問題を解決することである。ついではじめて，価値を交換に適用することが問題になることができる。二つの物の生産費が等しいなら，それらの物の比較上の価値をきめるために決定的な契機となるものは効用であろう」(S.507.訳551ページ)。

価値概念にかんしては以上のほかにも重要な意義をもつ指摘が見出されるのであるが，紙幅の制限を考慮して，ただ一点，価値と交換価値との区別と関連についてのエンゲルスの指摘をあげておくことにしよう。後年，マルクスが『資本論』第1巻第1章第1節においてはじめて首尾一貫して解明した本質としての価値にたいするその必然的な現象形態としての交換価値の把握は科学的な価値理論におけるもっとも重要な決定的要素ともいうべきものであるが，エンゲルスがすでにこの要素を認識していたことが，つぎの叙述によって裏書きされているのである。

「真実価値と交換価値との相違の基礎にはつぎのような事実がある――つまり，ある物の価

値は，商業のさいその代わりに与えられるいわゆる等価とは違っているということ，すなわちこの等価は等価ではないということがそれである。このいわゆる等価（Äquivaleut）は物の価格であって，もし経済学者が正直なら，彼は，この言葉を「商業価値」の代わりに用いるであろう。……価格が生産費と競争との相互作用によって決定されるということはまったく正しいことであって，私的所有の基本法則である。……」(S. 508. 訳552ページ，傍点―エンゲルス)。

エンゲルスは右の諸問題のほかに，生産費，なかんずく地代の問題，競争の法則，商業恐慌等，重要な諸問題についての含蓄ある的確な論評を展開しているのであるが，紙数の制限もあるので，ここでは，マルサス（Thomas Robert Malthus）の悪名高い「人口理論」についてどのような批判を与えているか，その要点を簡単にあとづけてみておくにとどめたいと思う。

(iv) マルサスの「人口理論」にたいする批判が示されているのは，第12番目の最も長い段落である。

エンゲルスは，まず，この「理論」を生みだした社会的基盤を明らかにしている 。

「資本対資本，労働対労働，土地対土地の闘争は，生産を高熱状態に駆り立て，この状態のもとでは自然的および合理的な関係をすべて転倒させる。どの資本も，それが自分の活動を最高度に発揮させなければ，他の資本の競争にたえることができない。どの土地も，その生産力をたえず高めていかなければ，耕作されて利益をあげることができない。どの労働者も，自分の全力を労働にささげなければ，その競争者に対抗することができない。総じて，競争戦に加わるものは，その力を極度にふりしぼらなければ，また真に人間的な目的をすべて放棄しなければ，これにたえることができない。一方におけるこの過度の緊張の結果は，必然的に他方における弛緩である。競争の動揺が小さく，需要と供給，消費と生産がほとんど相等しい場合には，生産の発展のうちに，あまりにも多くの過剰な生産力があるために，国民の大多数が生活に必要なものをなにももたず，人々がほかならぬ物資の過剰のために餓死するという段階がやってくるにちがいない。イギリスはすでにはやくから，このような気違いじみた状態，このような明らかに不合理な状態のもとにある。このような状態の必然的な結果として生産がいっそう激しく動揺すると，繁栄と恐慌，過剰生産と停滞との交代が生じる。経済学者は，この狂った状態を理解することがけっしてできなかった。それを説明するために，彼は人口理論を発明したが，この理論は，富と貧困とが同時に存在するというこの矛盾と同じように，否，それ以上に不合理なものである」(S. 516-517. 訳560-561ページ)。

つづいてエンゲルスは，「人類の自由にできる生産力は無限である」こと，「この無限の生産能力は，意識的にかつ万人のために使用されるならば，人類に課せられる労働をたちまち最小限に軽減するであろう」ことを述べ，しかし，私的所有の社会では，それは競争によって，対立した形でしか行なわれえないことをわかりやすく説明する。

「一部の土地はきわめてよく耕されているのに，他の部分は――グレート・ブリテンとアイ

ルランドには3000万エーカーの沃地がある――荒地となっている。一部の資本は驚くべき速度で流通しているのに，他の部分は金庫の中に死蔵されている。一部の労働者は1日14時間も16時間も働いているのに，他の部分は怠惰に仕事もせずに暮し，飢えに苦しんでいる。あるいはまた配分はこういうように同時にはあらわれない。すなわち，きょうは商業がうまくいき，需要は非常に旺盛で，すべてのものが活動し，資本は驚くべき速度で回転させられ，農業はさかえ，労働者はへとへとになるまで働いているが，――あすになると停滞が生じ，農業はむだな骨折りになり，広い土地が耕されないままになっており，資本は流動のまっただ中で凝結し，労働者には仕事がなく，国中は過剰な富と過剰な人口に苦しむ」(S. 517. 訳561ページ)。

この自明の説明をもって，エンゲルスは古典学派経済学者に向って，こう言うのである。

「事態をこのように説明することを，経済学者は正しいものと認めることができない。でなかったら，彼は，すでに述べたようにその競争学説全体を放棄しなければならないであろうし，自分が生産と消費を，過剰な人口と過剰な富を対立させていることの無意味さをさとらなければならないであろう。だが，事実を否認することはけっしてできなかったので，この事実を理論と一致させるために人口理論が発明されたのである」(S. 517. 訳561-562ページ)。

マルサスの発明した「人口理論」はあまりにも有名であるが，その本質を見とどけるために，やはりその内容を見る必要がある。

まず，その主張。――「人口はたえず生活手段を圧迫する。生産が高められるのと同じ割合で人口は増加する。そして意のままになる生活手段以上に増加しようとする人口特有の傾向が，あらゆる貧困，あらゆる罪悪の原因である。なぜなら，人間が多すぎる場合には，彼らは暴力的に殺されるか，それとも餓死するか，どちらかの方法で除去されねばならないからである。だがこういうことが生じると，再び間隙が生じ，これがただちにまた他の人口増加者によって満たされ，こうして再び旧来の貧困がはじまる。これはあらゆる事情のもとでそうなのであって，文明状態のもとばかりでなく，原始状態のもとでもそうなのである。1平方マイルに1人しかいないニュー・オランダの野蛮人も，イギリスと全く同じように過剰人口に苦しんでいる。要するに，首尾一貫したければ，われわれは，ただ一人の人間しか存在していなかったときでも，地球はすでに人口過剰であったことを認めなければならないのである」(S. 518. 訳562ページ，傍点―エンゲルス)。

この主張の結論。――「貧民はほかならぬ過剰なものであるから，彼らのためにしてやるべき唯一のことといえば，彼らをできるだけ容易に餓死させること，あるいはそれはなんとも仕様がないこと，そして彼らの階級全体にとってはできるだけ繁殖を少なくすること以外には救いの道はないこと，あるいは，もしこれがだめなら，「マーカス」が提案したように，貧民の子供を苦痛を与えずに殺す国家施設を設置するほうがもっともよいということを彼らに納得させることである。慈善は，過剰人口の増加を助けるから，犯罪であろう」(S. 518. 訳562ページ)。

以上のような主張内容をみれば，エンゲルスが下しているつぎの評言は，まさに的を射たも

のというべく，いささかの異論の余地もないところである。

「この下劣で軽蔑すべき学説。自然と人間にたいするこの恐ろしい冒瀆をこれ以上詳しく論じ，さらにこれ以上たどってその結論をひきだすべきであろうか？　ここにいたって，経済学者の不道徳性はついに絶頂に達せしめられている。この理論にくらべれば，あらゆる戦争や独占制度の恐ろしさはなんであろうか？　しかもほかならぬこの理論こそ，自由主義的な自由貿易主義学説のかなめ石であって，これが倒壊するとともに，建物全体も倒壊する。なぜなら，ここで競争が窮乏，貧困，犯罪の原因であることが立証されるならば，だれがそれでもなお競争をあえて弁護しようとするであろうか？」(S. 518. 訳562-563ページ)。

では，なぜ，マルサスはこのような「下劣で軽蔑すべき理論」をつくりだしたのであろうか？　エンゲルスは，マルサスの誤謬の根元を追究して，こう述べている。

「マルサスが問題をこのように一面的に観察しなかったならば，彼は，過剰な人口または労働力はつねに過剰な富，過剰な資本，過剰な土地所有と結びついていることを見たにちがいあるまい。人口が過大であるのは，生産力一般が過大であるところだけである。人口過剰な各国，とくにイギリスの状態は，マルサスが著作していた時代から，このことをきわめて明瞭に示している。これこそ，マルサスがその全体を観察しなければならず，またそれを観察したならば正しい結論に達したにちがいない事実であった。そうする代わりに彼は一つの事実をとりだし，他の事実をかえりみなかったので，彼の気違いじみた結論に達したのである。彼の犯した第二の誤りは，生活手段と就業との混同であった。人口がつねに就業の手段を圧迫するということ，どれだけ多くの人間が就業できても，それだけの人間が生まれてくるということ，つまり，労働力の生産はこれまで競争の法則によって規制され，したがってまた周期的な恐慌と動揺にさらされてきたということ，こういう事実を確定したのはマルサスの功績である。けれども就業の手段は生活の手段ではない。就業手段は，機械力と資本との増加によって増加するが，しかしその最終の結果として増加するにすぎない。生活手段は，生産力一般がいくらかでも増加するやいなや増加するのである[10]」(S. 519. 訳563ページ)。

マルサスによって代表される右のような錯乱した主張にたいする答えは，以上の論究によって簡単に導き出されるのであって，エンゲルスは，つぎのような解答を与えている。

「われわれは矛盾を揚棄することによって，簡単にこれを否定する。現在対立している利害が融和するとともに，一方の人口過剰と他方の富の過剰との対立も消滅し，一国民がただの富の過剰のために餓死しなければならないという驚くべき事実，あらゆる宗教のあらゆる奇跡をあわせたよりも驚くべき事実も消滅し，土地は人間を養う力をもたないという気違いじみた主張も消滅する」(S. 520. 訳564ページ)。

さて，マルサスの「人口理論」にたいするエンゲルスの的確・周到な批判のあらましはおよそ以上のとおりであるが，しかし，エンゲルスは，批判という言葉の意味内容をはるかに広くかつ深く理解している。というのは，批判の対象となっている「理論」の「根拠」を明らかに

するだけではなく，さらに，それがもっている客観的・歴史的な意義ないしは役割を十分に明確にすることができたときに，はじめてその批判は真の批判となりうるものだということを，われわれに実際に教示しているからである。科学的な批判とはどういうものでなければならないのかということを改めて反省するためにも，エンゲルスのマルサス「人口理論」にたいする批判の「結語」をつぎに引用してかかげておくことにしよう。

「とはいえ，マルサスの理論はまったく必要な通過点であって，これがわれわれを無限に前進させたのである。われわれは，総じて経済学のおかげでそうなったように，この理論のおかげで土地と人類との生産力に注意を払うようになったし，この経済学上の絶望を克服してからは，人口過剰にたいする恐怖を永久にもたないようになったのである。われわれは，この理論から社会改革が必要であるというもっとも有力な経済学的論拠を引き出す。なぜなら，たとえマルサスが完全に正しい場合でさえ，この改革に即座に着手しなければならないだろうからである。というのは，この改革だけが，またこの改革によって得られるべき大衆の教養だけが，マルサス自身人口過剰にたいするもっとも有効でもっとも簡単な解毒剤であると述べている，生殖本能の道徳的抑制を可能にするからである。われわれは，この理論のおかげで人類の甚しいいやしめ，競争関係への人類の依存を知った。この理論は，結局のところ私的所有が人間を商品にしてしまい，この商品の生産と破壊もまた需要だけに依存していること，またその結果競争の制度が幾百万の人間を殺戮したし，現に日毎に殺戮していることをわれわれに示した。すべてこうしたことをわれわれはみたが，すべてこうしたことがわれわれを駆り立てて，私的所有，競争および対立する利害の廃棄によって人類のこのいやしめを廃棄するようにさせるのである」(S. 520-521. 訳564-565ページ。傍点―山本)。

最後に，エンゲルスのこの労作を通じてもっとも重要でありまたもっとも適切であると考えられる眼目は，ひとつには，彼がつねに私的所有という生産関係を基盤において，これに規定

---

10) これにつづいて，エンゲルスは，古典学派経済学に一般的な根本的誤謬を明らかにしている。彼は，「ここで経済学の新しい矛盾が明るみに出てくる」と述べて，こう説明する。ここの批判も，まことに適切というのほかないものである。

「経済学者の理解する需要は真の需要ではなく，彼の理解する消費は人為的な消費である。経済学者にとっては，自分の受け取るものとひきかえに提供すべき等価をもっているものが，真の需要であり，真の消費者なのである。けれども，どの成人も自分で消費できるよりも多くのものを生産するということ，子供は樹木と同じく，それに費やされた支出を償って余りあるということが事実だとすれば――そしてこれは事実ではあるまいか？　――おそらくどの労働者も，彼が使用するよりもはるかに多くを生産できるにちがいなく，したがって社会は彼が必要とするすべてのものを喜んで彼に供給してやろうとおもうにちがいないし，またおそらく大家族は社会にとってきわめて望ましい贈り物であるにちがいないであろう。だが経済学者は，その観察が粗雑なために，手でつかめる現金で自分に支払われるもの以外の等価物のあることを知らないのである。彼が自分の対立物のなかにあまりにもしっかりとはまりこんでいるために，きわめて顕著な事実も，きわめて科学的な原則も，同じように彼には無関係なのである」(S. 519-520. 訳563-564ページ。傍点―山本)。

されるものとして経済法則および古典学派経済学の基本的カテゴリーを考察しているということであり，いまひとつは，その批判の眼はつねに狭い私的所有の限界を越えて，私的所有が必然的に揚棄された社会を見通して，そこで古い経済法則がどのように根本的に変化するか，また変化すべきであるかということを論究することを忘れていない，ということである。こうした点からみても，それは，まさしく古典学派経済学の批判の「天才的な見取り図」というべきなのである。

(2) マルクスにおける「経済学批判」

(a) 著作「経済学批判」体系の成り立ち

古典学派経済学にたいする体系的な批判を大成したのは，さきにも述べたように，エンゲルスの盟友マルクスであって，その批判そのものを主題とした労作としては，周知のように，『経済学批判』（Zur Kritik der Politischen Ökonomie. 1859）と主著『資本論』(Das Kapital. Bd. 1. 1867年，Bd. 2. 1885年，Bd. 3. 1894年）がある。著書『経済学批判』は，エンゲルスの『国民経済学批判大綱』の発表よりおくれてその15年後に出版されたものであるが，マルクスがエンゲルスとほぼ時を同じくして1840年代の半ばに同じ見解に達していたことは，さきに引用した『経済が批判』の「序言」の中のマルクス自身の言葉によっても疑う余地はない。しかし，念のため，右の「序言」の中の引用個所につづく叙述をすこしく引用しておくことにしよう(……は省略部分)。

「……1845年の春，彼もまたブリュッセルに腰をおちつけたときに，われわれは，ドイツ哲学のイデオロギー的見解にたいするわれわれの見解を共同してつくりあげること，事実上はわれわれの以前の哲学的意識を清算することを決意した。この企てはヘーゲル以後の哲学の批判というかたちで実行された。……当時われわれがあれこれの方面でわれわれの見解を世間に問うたばらばらの仕事のうちからは，私はエンゲルスと私が共同で執筆した『共産党宣言』と，私が公表した『自由貿易論』とだけをあげるにとどめる。われわれの見解の決定的な諸点は，1847年に刊行されたプルードンに反対した私の著書『哲学の貧困』のなかで，たんに論争のかたちでではあったが，はじめて科学的に示された。……」(Marx-Engels Werke, Bd. 13. S. 10. 邦訳大月版，第13巻，7－8ページ)。

マルクスが『哲学の貧困』を執筆する以前に，すでにさきにみたエンゲルスのそれと同じ「経済学批判」の観点を自分のものにしていたことを示すために，マルクスがプルードンの著書『貧困の哲学』をはじめて手にした直後に知友アンネンコフ（Павел Васильевич Анненков）にあてて書いた1846年2月28日付の手紙の一節をつぎに抜粋してかかげてみよう。

「こうしてプルードン氏は主として歴史的知識に欠けているために，人間はその生産諸力を発展させることによって，すなわち，彼らが生活することによって，一定の相互関係を発展させるということ，またこれらの諸関係の様式はこれらの生産諸力が変化し増大するにつれて必

然的に変化するということに気づかなかったのです。経済学的諸範疇はこれらの実在的諸関係の抽象にすぎず，それらはこれらの諸関係が存続するかぎりでのみ真理なのだということが，彼にはわかりませんでした。こうして彼は，これらの経済学的範疇を永遠の法則だと考え，特定の歴史的発展や生産諸力の特定の発展にのみあてはまる歴史的法則だとは考えないブルジョア経済学者の誤謬におちいっています。ですからプルードン氏は，経済学的諸範疇を現実的・過渡的・歴史的な社会的諸関係の抽象とは考えず，神秘的に転倒させることによって，現実の諸関係をこれらの抽象の具象化とばかり考えるのです。これらの抽象そのものはこの世のそもそものはじめから神の胎内でまどろんできた定式だ，というのです」(Marx-Engels Werke, Bd. 27. S. 457. 邦訳大月版，第27巻，393-394ページ，傍点―マルクス)。

ところで，マルクスの場合には，古典学派経済学の批判の仕方は，さきに見たエンゲルスの労作におけるそれとはかなりに違っている。それがどのようなものであるかということを知るために，『経済学批判』の著作の準備にとりかかっているときに，ラサール (Ferdinand Lassalle) にあてて書かれた1858年2月22日付の手紙の中の一節を，つぎにかかげてみよう (……は省略部分)。

「さしあたり問題となっている仕事は，経済学的諸範疇の批判である。言いかえるならば，ブルジョア経済学の体系を批判的に叙述することだと言ってもよい。それは同時に体系の叙述でもあり，また叙述を通ずるその批判でもある。全部でどれだけの印刷ページになるかは，僕には全然わからない。……

叙述は，と僕の言うのはそのやり方だが，まったく科学的であって，したがって普通の意味で警察の忌諱にふれるものではない。全体は6部に分かれている。1．資本について（二，三の序章をふくむ)，2．土地所有について，3．賃労働について，4．国家について，5．国際貿易，6．世界市場。もちろん僕はあちらこちらで他の経済学者たちに批判的顧慮を加えるのを避けるわけにはいかない。リカードゥでさえ市民として(qua Burger) 厳密な経済学的見地からしても誤謬を犯さざるをえなかったかぎりで，とくに彼との論争を避けることはできない。だが全体として経済学と社会主義との批判と歴史とは，別の著作の対象とするつもりだ。最後に経済学的諸範疇と諸関係との発展の簡潔な歴史的梗概は第三の著作にするつもりだ。……」(Marx-Engels Werke, Bd. 29. S. 550-551. 邦訳大月版，第29巻，429-430ページ，傍点―マルクス)。

マルクスがどのような仕方でブルジョア経済学＝古典学派経済学を批判しようとしているかということは，ここに引用した手紙の前半で説明されている。それは，個々の命題とか個々の経済法則についてその誤りを批判するというものではない。批判とは，たんにその論者の理論的誤謬の指摘にとどまっているものであってはならないのである。問題となっている命題なり範疇なりについて，批判者自身が正確な理解を自分のものにしていて，その理解するところを的確に説明することによって，批判の対象である論者の命題なり範疇についてはじめてそれのどこが，なぜ，どのようにして誤っているかということが正確に解明されることになるのであ

る。ところで，経済学は一個の科学（Wissenschaft）であり，それは，個々の経済学的概念にかんする知識の寄せ集めではなく，正確に構成された理論体系でなければならない。個々の経済学的範疇は，この科学的な理論体系の中で，どの段階において，どのような意味をもって位置するものかということが明確にされえたときに，そのときにはじめて正しく把握されえたということができるのである。それゆえ，古典学派経済学者の唱える個々の命題や経済学的範疇を批判するためには，批判者自身が厳密に科学的な理論体系を自分のものとしていなければならないのであり，またその把握した理論体系とつきあわせることによってはじめて真に正しい科学的批判がそこに生まれるということになるのである。マルクスが，「経済学的諸範疇の批判」ということを「ブルジョア経済学の体系を批判的に叙述すること」と言いかえ，さらにそれが同時に「体系の叙述」であり，「叙述を通ずるその批判」でもあると述べているのは，実に，右のような科学的な理論体系をつくりあげてその中で，これを通じて，はじめて批判を展開することができるし，またそのようにしてはじめて批判がなしとげられなければならない，ということを明らかにしているものである。マルクスがはじめてなしとげた右のような科学的批判の意義については，盟友エンゲルスもこれを明らかにしているのであって，マルクスの「経済学批判」の最初の労作，『経済学批判』（Zur Kritik der Politischen Ökonomie）が1859年6月に出版されるや，エンゲルスはただちに，同年8月6日付『ダス・フォルク』（Das Volk）第1号に「カール・マルクス『経済学批判』」と題する論説を発表し，その画期的意義を明確にするとともにそれを学習することの緊要性を宣伝することに力を注いだのであるが，その書評の「2」の冒頭にはつぎのような説明がおかれているのである。

「本書のような著作においては，経済学から個々の章をとりだして脈絡のない批判をするとか，経済学上の論争問題のあれやこれやを切り離して取り扱うことが問題になっているのではない。むしろ本書のめざしているのは，はじめから，複雑な経済科学の全体の体系的総括であり，ブルジョア的生産およびブルジョア的交換の諸法則の連関的な展開である。経済学者というものはこれらの法則の通訳者，弁護者にほかならないから，この展開は同時に経済学文献全体の批判でもある」（Marx-Engels Werke, Bd. 13. S. 472. 邦訳大月版，第13巻，474ページ）。

さきに引用したラサールあての手紙にも記されているように，マルクスの「経済学批判」の体系は，資本，土地所有，賃労働，国家，外国貿易，世界市場の6部から成るもので，マルクスはそのために尨大な草稿をつくりあげることにつとめたのであるが，しかし結局その労作の出版は「不定期の分冊」というかたちでおこなわれることになり，1858年4月2日付エンゲルスあての手紙の中で，マルクスは，四つの篇[11]から成る「第1部　資本」の第1篇を「資本一般」（Kapital en general）と題し，その内容を「1　価値。2　貨幣。3　資本」として，こ

11）四つの篇は「a）資本一般。b）競争または多数資本の対相互の行動。c）信用。ここでは資本が個々の諸資本に対立して一般的な要素として現われる。d）株式会社。もっとも完成した形態（共産主義に移るための）であると同時に資本のあらゆる矛盾をそなえるものとしてそれ」。

れを第1分冊として出すという考えを述べている（ibid. Bd. 29. S. 314-318. 訳246-250ページ）。

ところが，実際に出来あがった原稿は右とまったくちがって，エンゲルスあての1859年1月の手紙には，すでにドイツの出版業者ドゥンカー（Franz Gustav Dunker）に送られた原稿について，こう書かれているのである。

「原稿は12印刷ボーゲン（ノート3冊）ほどだが――たまげるなかれ――表題は「資本一般」（Das Kapital im allgemeinen）ということになっていながら，このノートには資本についてはまだ**なに一つ**入っていないで，1．商品，2．貨幣または単純な流通，の2章しかないのだ。つまり，細目にわたって手を入れた例の部分（5月に君のところへ行った時）はまだ全然本にならないというわけだ。これは二つの点からみてよいことだ。もし評判がよければ，すぐに資本についての第3章を続いて出せる。第二に，出版された部分では，問題の性質上，連中とてもただの底意のある悪口だけで批判はおしまいというわけにはいかず，それに全体が非常に厳密で学問的な外見を呈しているだけに，奴等も後に資本にかんする僕の見解を相当真剣に考えざるをえなくなろうというものだ。それはそれとして，こういう実際上の便宜はいっさい抜きにしても，貨幣にかんする章はこれに精通している者にとっては興味ぶかいものになるだろうと思う」（Marx-Engels Werke, Bd. 29. S. 383. 訳299-300ページ，ゴシック体および傍点―マルクス）。

マルクスの報告しているように，実際に出版された『経済学批判』の目次（Inhalt）は，つぎのとおりであって，「資本」についての論究はまったく欠けているのである。

序言
第1部　資本について
　第1篇　資本一般
　　第1章　商品
　　A　商品の分析の史的考察
　　第2章　貨幣または単純流通
　　1　価値の尺度
　　B　貨幣の度量単位にかんする諸理論
　　2　流通手段
　　a　商品の変態
　　b　貨幣の流通
　　3　貨幣
　　a　貨幣蓄蔵
　　b　支払手段
　　c　世界貨幣
　　4　貴金属

C　流通手段と貨幣にかんする諸理論

この目次によってもわかるように，マルクスは，まず第1章で「商品」の分析を十分におこなったのち，つづいて「A　商品の分析の史的考察」において，商品にかんする古典学派経済学者の「分析」をとりあげてこれに批判的考察を加え，また，第2章においてもまず貨幣の分析を十分に展開しておいて，これにもとづいてそれぞれ「B」および「C」においてヒューム（David Hume）以下リカードゥ，ミル（James Mill）の諸理論にたいする批判的考察をおこなっているのであって，商品および貨幣にかんするかぎりでの「経済学批判」がそこに展開されているといえる。

しかし，その目次の最初にかかげられた「第1篇　資本一般」についてはまったくふれられておらず，おそらくつづく第2分冊でこれを取り扱う予定であったと思われる。だが，その後の研究の結果，彼は最初にたてたプランを変更して，「資本」にかんする4巻の書物をつくりあげることにしたのであって，この間の経緯を物語っているマルクスの知友クーゲルマン（Ludwig Kugelmann）あての手紙2通について関連個所を抜粋してみよう。

（1862年12月28日付手紙から）

「お手紙をみて，あなたやあなたの友人たちが私の『経済学批判』に熱心な関心をお寄せになっていることがわかり，たいそううれしく思いました。第2部はいまやっとできあがったところです。つまり印刷するために浄書し最後の仕上げをするところまできています。ほぼ30印刷ボーゲンになるでしょう。これは第1分冊の続きですが，独立して『資本』という表題で刊行され，「経済学批判」というのはたんなる副題となります。事実それは第1部第3章をなす予定のもの，つまり「資本一般」をふくむだけです。ですから諸資本の競争や信用制度はそこにふくまれていません。イギリス人が「経済学原理」と呼ぶものがこの巻にふくまれています。これは（第一の部分とあわせて）核心的部分で，これに続くものの展開は（たとえば社会のさまざまな国家形態の関係などをのぞけば）ほかの者でもすでに与えられているものを土台にすれば容易になしとげられるでしょう」(ibid. Bd. 30. S. 639. 訳517-518ページ，傍点―マルクス)。

（1866年10月13日付手紙から）

「私の事情（身体のためや日常生活のためのひっきりなしの中断）のために，最初にもくろんでいたように二巻を一度にではなく，まず第1巻を出さなければならなくなりました。それからまた今度はおそらく三巻になるでしょう。

すなわちこの著作全体は次の部分に分かれます。

第1部　資本の生産過程。
第2部　資本の流通過程。
第3部　総過程の態容。
第4部　理論の歴史のために。

第1巻ははじめの二部を含みます。

第3部が第2巻，第4部が第3巻を占めると思います。

第1部ではまた最初から始めること，すなわちドゥンカーから出た私の著作を商品と貨幣とにかんする一つの章に要約することが必要だと考えました。それを必要と考えたのは，完全にするためばかりでなく，頭の良い人でもこの問題を完全に正しくは理解しなかったし，したがって最初の叙述，ことに商品の分析にはなにか欠点があったにちがいないからです。たとえばラサールは，私が展開したものの「精神的精髄」を与えていると称する彼の『資本と労働』のなかで，大きな誤謬を犯しています。もっともこうしたことは，私の著作をひどく無遠慮に自分のものにしてしまう彼の場合，しょっちゅう生ずるのです。滑稽なのは，私がそれにあたらないで往々記憶から引用しているために生じた，文献的－歴史的な「誤り」まで，彼はそのまま引き写していることです。序文でラサールの剽窃についていくらか触れるかどうかについては，まだはっきりきめていません」(ibid. Bd. 31. S. 534. 訳443-444ページ，傍点―マルクス)。

このあとの手紙にある予定も変更されて，今日公刊されているのは『資本』(Das Kapital, Kritik der Politischen Ökonomie)（第1巻　資本の生産過程，第2巻　資本の流通過程，第3巻　資本主義的生産の総過程，ただし，現行版の第2巻と第3巻はエンゲルスの編集によるものである。なお，この主著の訳は，慣例にしたがって『資本論』とすることにした）で，なおその第4巻にあたるものとして『剰余価値学説史』(Theorien über den Mehrwert)が公刊されている。さきのラサールあての手紙（本稿70ページ参照）でマルクス自身が宣言している「ブルジョア経済学の体系の批判」，つまり「体系の叙述を通じてのその批判」は，こうしてついに大著『資本論』に結実したということができる。なお，著書『経済学批判』と『資本論』との関連については，マルクス自身が『資本論』の「第1版序文」の冒頭で釈明しているので，つぎにこれを引用しておこう。

「ここにその第1巻を読者におくるこの著作は，1859年に刊行された私の著書『経済学批判』の続きとなるものである。初めと続きとの間の長い休止は，長年にわたる病気のせいで，これが私の仕事をいくたびとなく中断させたのである。

まえのほうの著書の内容は，この第1巻の第1章に要約してある。そうしたのは，ただ関連をつけ完全にするためだけではない。叙述が改善されている。以前にはただ暗示されただけの多くの点が，ここでは，事情の許すかぎり，さらに進んで展開されており，また反対に，あちらでは詳しく展開されていることが，こちらではただ暗示されるにとどまっている。価値理論および貨幣理論の歴史に関する諸節は，今度は，当然のこととして，全部なくなっている。とはいえ，以前の著書の読者は，第1章の注のなかにこの理論の歴史のための新たな資料が示されているのを見いだすであろう」(ibid. Bd. 23. S. 11. 訳大月版，7ページ)。

以上，マルクスによる「経済学批判」が主著『資本論』に結実し集大成されるにいたった経緯について概観してきたのであるが，この『資本論』において経済学，とくに古典学派経済学がどのように批判されているかをたちいって考察することは，結局『資本論』の内容全体につ

いての吟味ということに帰着しかねないのであって，とうてい簡単にすまされるものでないことは，言わずして明らかである。そこで，『資本論』の叙述体系のあり方についての要点は，この論稿の「四　科学的経済学の骨格」のうちの「(3)　理論体系」の項にゆずることとし，ここでは，「生産，分配，交換(流通)，消費」といった「経済学の体系」にたいする批判と，古典学派経済学の基本的支柱としての「三位一体的定式」にたいする批判との二つをとりあげて，その内容を簡単に見ておくことにしたいと考える。

(b)　「経済学の体系」にたいして

「経済学原理」なるものを「生産，分配，交換(流通)，消費」という篇別順序で展開するというやり方は，厳密にいえば「体系」などという言葉には相当しないものであるが，一応「体系」と名づけるとすれば，こういう著作構成の仕方は，おそらく，さきにみたように，ミルあたりからはじめられたものと思われる。そして，この種の「体系」は，ミル以後の古典学派経済学者によって踏襲され，その後の俗流経済学者によってこぞって歓迎されるところとなり，今日にいたるまでひろく一般に，そしてとくに官許御用学者によって，なんらの根拠も示されることなく，そのまま真似されてきているのである。それが俗流経済学＝官許経済学によって唯一の「体系」として固持されているのは，この「体系」が，資本家階級と土地所有者階級による搾取＝支配の体制を隠蔽し，これを「合理化」する「学問的」弁護論にとってはもっとも好都合であり，それ以外の「体系」は，右の体制の秘密を明るみに出す恐れが多分にあるからである。

右の「体系」にたいする批判は，マルクスが著書『経済学批判』をつくりあげる以前に覚書として書いておいた『序説』の中で詳しくおこなわれている。この『序説』は，未完のままで発表されないでおわった[13]もので，今日では一般に遺稿『経済学批判への序説』(Einleitung zur Kritik der Politischen Ökonomie) と呼ばれているのである。

この『序説』の内容は未完の目次によればつぎのとおりである。

Ⅰ．生産，消費，分配，交換（流通）

1　生産

2　分配，交換，消費にたいする生産の一般的関係

---

13) これについて，マルクスは，『経済学批判』の「序言」の中で，つぎのように説明している。

「まえにざっと書いておいた一般的序説は，これをひかえることにする。というのは，よく考えなおしてみると，これから証明されるべき諸結果を事前に示すことは，妨げになるように思われるからである。およそ私についてこようとする読者は，個別的なものから一般的なものへのぼっていく覚悟をもたなければならないからである」(ibid. Bd. 13. S. 7. 訳5ページ)。

しかし，マルクスならぬ一般読者には「個別的なものから一般的なものへのぼっていく」ことはけっして容易ではなく，また，この『序説』のなかには，「体系」の批判のほかに，きわめて重要な意義をもつ「経済学の方法」が論究されているのであって，マルクスがこの『序説』を書きあげて公刊してくれたならばどんなにか裨益するところ大であったろうにと思われるのである。

(a)　生産と消費

(b)　生産と分配

(c)　最後に交換と流通

3　経済学の方法

4　生産。生産手段と生産関係。生産関係と交通関係。生産・交通関係との関係における国家形態と意識形態。法関係。家族関係。

当面とりあげられなければならないのは，いうまでもなく，上のうちの「1」と「2」の内容である。

はじめに，「1　生産」について。

冒頭の二つの文章がまず研究対象についての規定を明らかにしている。

「ここでの対象はまず第一に物質的生産である。

社会のなかで生産をおこなう諸個人――したがって諸個人の社会的に規定された生産，いうまでもなくこれが出発点である」(ibid. Bd. 13. S. 615. 訳611ページ)。

右のうちで，「諸個人の社会的に規定された生産」ということについて，マルクスは，スミスやリカードゥが出発点としている個人は，歴史的に形成された資本主義社会の個人であって，この社会でのみ人間は「ばらばらな個人」として生産することができるのであり，しかも目に見えない社会的紐帯のもとで個別化することができる，ということを説明し，これによって，つぎのことを導き出してくる。

「生産という場合には，いつでも，一定の社会的発展段階での生産――社会的な諸個人による生産をいうのである。それゆえ，およそ生産について語るためには，われわれは歴史的発展過程をその種々の段階で追跡しなければならないか，または，われわれが取り扱うのは，ある一定の歴史的時代，たとえばじっさいわれわれの本来の主題である近代的ブルジョア的生産だということをまえもって言明しておくか，そのどちらかであるように思われるかもしれない」(ibid. T. 616-617. 訳612-613ページ)。

ここでマルクスは「思われるかもしれない」(Es könnte daher scheinen) と言っているのは，いうまでもなく「その通りである」という意味なのであるが，そのような表現をとったのは，それにつづいて述べられているように，そこにはまだ「生産上のすべての時代がいくつかの標識をもっており，共通な規定をもっている」ということがあり，「生産一般」というものが「一つの抽象」ではあるが，それが「共通なもの」を明瞭にし，「反復の労を省く」というかぎりで「合理的な抽象」だということがあるからである。しかし，この「生産一般にあてはまる諸規定」によってはそれぞれ異なった社会の本質的な相違が見失われる恐れもあるのであって，ここにブルジョア経済学者の知恵が働く余地があるのである。たとえばさきにミルについてみたように，どんな生産でも生産用具なしには不可能であり，積み重ねられた労働なしには不可能であるということから，「資本は，生産用具であり，過去の客体化された労働である」

といったまやかしの「理論」がつくりだされるのである。

つぎにマルクスは，「一般的な部分を経済学のまえおきにすることは，はやりである」(ibid. S.618. 訳614ページ)と述べて彼らのあげる「一般的条件」について検討を加えるが，そのさい経済学者の弄する悪辣な常套手段がそこでみごとに暴露されているのである。

「しかし，この一般的な部分で経済学者たちが実際にかかわりあっているのは，これだけではない。生産は，むしろ——たとえばミルを見よ——分配などとはちがって，歴史からは独立した永久的自然法則にはめこまれたものとして示されるべきものとされ，しかもそのさい，ブルジョア的諸関係が社会一般のどうにもできない自然法則としてまったくこっそりと押しこまれるのである」(ibid. S. 618-619. 訳 614-615 ページ，傍点—マルクス)。

この「1　生産」の結びの「要約」は，右の批判を確認しているものである。

「要約すれば次のようになる。すべての生産段階に共通な諸規定があって，それらは思考によって一般的な規定として固定される。しかし，すべての生産の一般的な条件と言われるものは，このような抽象的な契機以外のなにものでもないのであって，これによっては現実の歴史的生産段階はけっして把握されてはいないのである」(ibid. S. 620. 訳616ページ，傍点—マルクス)。

つぎに，「2　分配，交換，消費にたいする生産の一般的関係」について。

マルクスは冒頭でまず，

「生産についてのさらに進んだ分析にはいるまえに，経済学者たちが生産とならべてあげる種々の項目を見ておくことが必要である。」(ibid. S. 620. 訳616ページ)

と述べて，経済学者たちの「ありふれた」知恵のほどを丁寧に披露する。

「ありふれた考え方では次のようになる。生産では，社会の成員が天然の生産物を人間の欲望に適合させる（つくりだす，形づくる）。分配は，個人がこの生産物の分け前にあずかる割合を規定する。交換は，分配によって自分の手にはいった分け前を特殊な生産物に換えようとする個人に，この特殊な生産物を供給する。最後に，消費では，この生産物が享楽の対象になり，個人的取得の対象になる。生産は，欲望に対応する対象をつくりだす。分配は，これらの対象を社会的法則にしたがって分ける。交換は，すでに分配されたものを再び個々の欲望に応じて分けなおす。最後に，消費では，生産物はこの社会的運動の外に出て，直接に個々の欲望の対象および奉仕者になり，享受でこの欲望を満足させる。こうして，生産は出発点として，消費は終点として，分配と交換は中間として現われる。中間は，それ自身また二重である。というのは，分配は社会から出発する契機として規定され，交換は個人から出発する契機として規定されているからである。生産では人が客体化され，消費では物が主体化される。分配では，社会が一般的な支配的な諸規定の形態で生産と消費とのあいだの媒介を引き受ける。交換では，生産と消費とが個人の偶然的な規定によって媒介されている。

分配は，生産物が個人のものになる割合（分量）を規定する。交換は，個人が分配によって自分に当てられる分け前として要求する生産物を規定する」(ibid. S. 620-621. 訳616-617ページ)。

このちょっと見には「整然とした推論式」にみえる論法が，その実，お話にならないほどひどくお粗末なものであることは，すぐにばれるようなものである。マルクスはこれについて懇切丁寧にその論理的錯乱ぶりを説明しているのであるが，さきにミルの同様の主張についてそのまやかしぶりを見てきているので，紙数の制限を考慮して，以下では，マルクスの批判の要点を摘記するだけにとどめよう。

（a）「生産と消費」

生産は直接に消費でもある。二重の消費，すなわち主体的な消費＝人間の諸能力の支出と，客体的な消費＝生産手段（燃料，原料，機械，道具）の消費。

消費は直接に生産である。消費は生産を二重に生産する。(1)消費によってはじめて生産物は現実の生産物になる。(2)消費は新たな生産への欲望をつくりだす。

結局，消費と生産との同一性は三重に現われる。

(1)直接的同一性。生産は消費であり，消費は生産である。

(2)それぞれ一方のものが他方のものの手段として現われ，他方のものによって媒介されている。

(3)両者のそれぞれが，自分を完成することによって，他方のものをつくりだすのであり，自分を他方のものとしてつくりだすのである。

（b）「生産と分配」

「分配形態としての利子や利潤は，生産能因としての資本を前提する。それらは，生産能因としての資本を前提する分配様式である。

同様に，労賃も，賃労働が別の項目のもとで考察されたものである。すなわち，労働が後者で生産能因としてもつ規定性が，分配規定として現われるのである。……最後に地代であるが，土地所有が生産物の分け前にあずかる最も発展した分配形態をいきなりとってみれば，地代は生産能因としての大土地所有（実は大農業）を前提するのであって，たんなる土地を前提するのではない。……分配の編成はまったく生産の編成によって規定されている。分配は，それ自身生産の所産なのである」(ibid. S. 626-627. 訳622-623ページ)。

「最も浅薄な見解では，分配は生産物の分配として現われ，したがって生産から遠く離れたもの，生産にたいしてまるで独立しているようなものとして現われる。しかし，分配は，それが生産物の分配である前に，(1)生産用具の分配であり，(2)同じ関係のいっそう進んだ規定ではあるが，いろいろな種類の生産への社会成員の分配である。(一定の生産関係のもとへの個人の包摂。) 生産物の分配は，明らかに，ただ，このような，生産過程そのもののなかにふくまれていて生産の編成を規定している分配の結果でしかない」(ibid. S. 628. 訳623-624ページ)。

（c）「最後に交換と流通」

「流通は，それ自身，ただ交換の一定の契機でしかない。あるいはまた，その総体において見られた交換でしかない。

交換が，生産およびそれによって規定されている分配と消費とのあいだの媒介的な契機でしかないかぎりでは，しかしまた，消費も，それ自身，生産の契機として現われるかぎりでは，交換もまた明らかに生産のうちに契機としてふくまれている。

まず第一に，生産そのもののなかでおこなわれる諸活動や諸能力の交換が，直接に生産に属しており，本質的に生産を形成しているということは明らかである。第二に，同じことは生産物の交換についても言える。すなわち，生産物の交換が，直接的消費に向けられる完成生産物を生産するための手段であるかぎりでは，そう言える。そのかぎりでは，交換そのものが生産にふくまれる行為である。第三に，いわゆる商人どうしのあいだの交換は，その組織から見てもまったく生産によって規定されているし，それ自身がまた生産活動でもある。交換が生産とならんで独立に現われ，生産に無関係なものとして現われるのは，ただ，生産物が直接に消費のために交換される最後の段階だけでのことである。しかし，(1)分業がなければ交換はない。その分業が自然発生的であろうと，それ自身すでに歴史的結果であろうと。(2)私的交換は私的生産を前提する。(3)交換の集約度もその範囲もその仕方も，生産の発展と編制とによって規定されている」(ibid. S. 630. 訳625-626ページ，傍点―マルクス)。

以上の論究をまとめて，マルクスは最後につぎのような要約を示している。

「われわれが到達した結果は，生産，分配，交換，消費が同じだということではなくて，それらはすべて一つの総体の構成部分をなしており，一つの統一体のなかでの区別をなしているということである。生産は，対立的に規定された生産としてのそれ自身を包括しており，また諸契機をも包括している。過程はたえずくりかえし生産から始まる。交換や消費が包括的なものでありえないということは，自明である。生産物の分配としての分配もやはりそうである。しかし，生産能因の分配としては，分配はそれ自身生産の一契機である。したがって，一定の生産は，一定の消費，分配，交換を規定し，これらの種々の契機相互間の一定の諸関係を規定する。もちろん，生産もまた，その一面的な形態では，それ自身他の諸契機によって規定されるのである。……」(ibid. S. 630-631. 訳626ページ，傍点―マルクス)。

以上長きにわたって引用してきたマルクスの懇切な説明によっても明らかなように，「経済学原理」と称する論著を「生産，分配，交換＝流通，消費」といった篇別の組合せによって構成するという，俗流経済学特有の「経済学の体系」なるものは，まったくの誤謬であり，論理的思考能力の欠如と錯乱的推論の典型であるばかりでなく，資本と土地の所有者による労働者の搾取＝支配を隠蔽し「合理化」するというよこしまな了見からつくりだされたものにほかならないのである。こういう「篇別構成」＝「体系」をあやつる経済学者は，そのことによって，客観的には，「理論体系」がどういうものであるかということがまったくわかっていないこと，つまり，学問または科学（Wissenschaft）についての完全な無知と曲解の持主であることを実証してくれているものというべきなのである[14]。

（c）「三位一体的定式」(die trinitarische Formel) にたいして

「およそ生産の不可欠の要素は，資本，土地および労働の三つであり，したがって分配は，当然に，資本家には利潤，土地所有者には地代，そして労働者には労賃ということになる」という主張は，古典学派にはじまって今日の官許・俗流経済学にいたるまで，もっとも基本的な「原理」として唱道されてきたものであるが，それらが理論的にも実際的にも，まったく矛盾だらけの不合理きわまるこじつけにすぎないことは，すこしく論理的に考えるならば，容易に見抜かれるところである。

マルクスは主著『資本論』第1巻第6篇において労賃の本質を明らかにし，また第3巻において利潤，利子および地代の本質をあますところなく究明したのち，第3巻の最後の第7篇を「諸収入とそれらの源泉」と題し，まずその冒頭の第48章「三位一体的定式」において，俗流経済学に典型的な右の主張をとりあげて，これに厳密な批判を加えているのであるが，ここでは，紙幅の制限をも考慮して，そのなかのもっとも適切で肝要と考えられる叙述部分を抜粋してかかげておくことにしたいと思う。

まずその「1」は，つぎの説明で始まっている。

「資本―利潤（企業者利得・プラス・利子），土地―地代，労働―労賃，これは，社会的生産過程のあらゆる秘密を包括している三位一体的形態である。

さらに，前にも明らかにしたように，利子は資本の本来の特徴的な所産として現われるが，

14）わが国でひところ著名な「マルクス経学済者」の名を馳せていた宇野弘蔵氏は，マルクス主著だけを研究材料としてそこに「欠陥」やら「誤謬」を探し出すことに努めるという文字どおりの「経済家」であるが，「経済学」という学問は，「原理論，段階論，現状分析」の三つから成り立つものとの主張をかかげ，また，その主著『経済原論』はことさら，「第1篇　流通論，第2篇　生産論，第3篇　分配論」という篇別構成をとっているのである。

そもそも「原理」(principle)とは，さきに古典学派経済学者の主張について検証されたように，この資本主義社会を永遠に調和的発展をとげるべき文明社会と考え，その調和的発展を保証するものとしての生産・分配の準則または規範をこそ指していったもので，本来科学が研究対象とすべき社会的自然法則とはまったく異なるものであり，資本と土地の所有者階級の搾取＝支配を「合理化」する似而非原則にほかならない。このことは，マルクス＝エンゲルスのどの著作においても明確に示されているのであって，このことを読みとることができないばかりか，俗流経済学者よろしく，「原理」などという言葉を弄する輩は，「マルクス経済学」の名を騙るものとの評価を免れえないであろう。ところで，わが宇野先生は，「原理」を説くばかりでなく，「原理論」と称する「学問」までも発明したものである。この「原理論」という言葉は，日本の一部でだけで通るようであるが，外国語には翻訳できないという代物で，私はかねてからあまたの「宇野学派」の人々にこれを英語かドイツ語で表現してくれるようくりかえし要請しているのであるが十数年ものあいだいまだに解答に接しえない。外国語で正確に表現できないような言葉は，官学的誇大妄想が幅をきかしているこの国だけにしか生まれない，素人だましの迷語だということである。

ところで，右にみたように，わが宇野先生の主著は，俗流経済学者の篇別構成をたんに真似たばかりでなく，さらにその上をいく「世界的水準」のものとなっている。つまり，その第1篇は生産論ではなくて，なんと「流通論」となっているのである。この世界に類例をみない超俗流的構成の秘密は，つぎに見られるように，「流通形態」という驚倒すべき迷語にあるのである。宇野先生の発明にかか

企業者利得は，それとは反対に，資本にはかかわりのない労賃として現われるので，かの三位一体的形態は，もっとよく見れば次のような形態に帰着する。

資本―利子，土地―地代，労働―労賃。この形態では，資本主義的生産様式を独特に特徴づける剰余価値形態である利潤は，幸いにも除かれている」(ibid. Bd. 25. S. 822.訳1043-1044ページ)。

ついで，マルクスは，右の三位一体的定式に分析を加えている(……は省略部分)。

「第1に，年々処分される富の諸源泉といわれるものは，それぞれまったく別々の部面に属していて，相互の間にはほんのわずかの類似もない。それらの相互の関係は，公証人の手数料と人参と音楽との関係のようなものである。

資本，土地，労働！　しかし，資本は物ではなく，一定の，社会的な，一定の歴史的な社会構成体に属する生産関係であって，この生産関係がある物で表わされてこの物に一つの独自な社会的性格を与えるのである。資本は，物質的な生産された生産手段の合計ではない。……

そして，次には資本と並んで土地が，無機的自然そのものが，まったく野生のままの「粗雑な混沌とした塊」がある。価値は労働である。それゆえ，剰余価値は土地ではありえない。……

そして，最後に，一体のうちの第三位として，単なる幽霊――労働「というもの」があるが，

るこの画期的迷語の意味と役割は，つぎにあげる先生の三つの主張を読みくらべることによって簡単にわかる。

1　「商品・貨幣・資本は流通形態である。」

2　「商品・貨幣・資本の流通形態は，事実上も論理上も生産過程と直接関連はなく，いいかえれば生産物がいかなる生産関係の下に生産されたかに関係ないものである。」

3　「したがって，経済原論は，当然に流通論をもって始められ，生産論はこの流通形態によって把握された生産過程として，その次に展開されることになる」(新著『経済原論』，16ページ)。

まず，「流通形態」という迷語がどのようにしてつくられたかといえば，それを生みだしたのは，つぎのような迷論法＝「論理構成」である。

「商品は流通する。
貨幣は流通する。
貨本も流通する。
だから（!!），商品，貨幣，資本はいずれも流通形態である」。

流通（Zirkulation）は一定の形の運動を指したものであって，「流通形態」などという**キテレツ**なものはありようがない。右の論法は，次の論法と完全に同じものあって，それが「形態」という用語についての完全無欠の没理解を示しているばかりでなく，論者の錯乱的思考癖を如実に示すものでしかないことは，これでもよくわかる。

「猿は歩行する。
チンパンジーは歩行する。
人間も歩行する。
だから（!!），猿，チンパンジー，人間は，いずれも歩行形態である」!!

読者諸君にはすでによくおわかりのこととおもうが，宇野先生は「形態」という肝心の言葉の意味

これは一つの抽象以外のなにものでもなく，またそれだけとして見ればけっして存在しないものである。……それは，人間が自然との物質代謝をそれによって媒介する生産的活動一般である。……」(ibid. S. 822-823. 訳1044-1045ページ)。

「この定式で第一に目につくことは，資本と並んで，この，一つの生産要素の形態，といっても一定の生産様式に属し社会的生産過程の一定の歴史的姿態に属する形態と並んで，つまり一定の社会的形態と結合していてこの形態をとって現われている一つの生産要素と並んで，一方には土地という，他方には労働という，実在的な労働過程の二つの要素が無造作に排列されているということであるが，これらのものはこのような素材的な形態にあってはすべての生産様式に共通なものであり，生産過程の素材的要素でもあるのであって，この生産過程の社会的形態とはなにも関係はないのである。

第2に，資本―利子，土地―地代，労働―労賃という定式では，資本，土地，労働は，それぞれ，その生産物であり果実である利子(利潤ではなく)，地代，労賃の源泉として現われる。前者は理由で後者は帰結であり，前者は原因で後者は結果である。しかも，それぞれの源泉が，自分から突き出されたもの，生み出されたものとしてのそれぞれの生産物に関係させられてい

はまったくわからないのである。経済学で「形態」とは，「形態規定」(Formbestimmung) のことであり，社会的・経済的な形態を指していった言葉である。たとえば，商品というのは私的所有の社会での労働生産物の形態規定であり，貨幣とは金の形態規定である，つまり，商品・貨幣・資本そのものが，形態規定にほかならないである。私は，いまから18年前に本誌に拙論『経済学における「形態規定」とはなにか――いわゆる「宇野理論」の性格規定―(1)および(2)』(本誌第24巻第2，3号所載)を発表してその中で宇野先生独自の迷語・迷論法を詳しく分析し，なお，「形態規定」の意義を明確にしたうえで，先生にたいして，「ぜひとも，「形態」および「形態規定」という用語の意味を明確に説明し」てくれるよう切に要請したのであるが，これにたいする答えはすっぽかされたままに終わってしまったものである。宇野先生がついに最後までその意味を理解することが全くできなかったものには，また「流通」という言葉がある。先生は，「商品は流通するから，流通形態である」という迷論をこしらえあげているのであるが，実は，誰にもすぐわかるように，商品は流通しないし，流通するものではないのである。商品は生産者＝販売者の手から――貨幣とひきかえに――購買者の手に移っておしまいなのである。たとえその中間に問屋，商人がいくら介在しても事柄に変わりはない。商品は貨幣と交換されるだけであって，そこには流通と名づけられる運動はないのである。先生は，おそらく，『資本論』第1巻第3章の表題が「貨幣または商品流通」となっているところから，「商品は流通する」という迷文句を考えついたものと思われるが，残念ながら，右の「商品流通」は，「die Warenzirkulation」，つまり，「すべての商品が，流通部面における貨幣の媒介によってすべて絡み合った転態を通じて，生産部面から消費部面への運動をとげる」ということを指していったもので，Waren は個々の商品のことではないのである。

要するに，宇野先生の説くところは，超論理的・超国語的迷語の綴り合わせというのほかないもので，かつてエンゲルスが生半可な「マルクス経済学者」たちに与えた「乾葡萄(コリンテン)の糞(シャイサー)ひり」という評語は，分に過ぎてとうてい似つかわしいものではない。もしマルクス本人が存命だとしたならば，彼は，この自称「マルクス経済学者」先生にたいして，「私の著作だけをねたにして前代未聞の迷語・迷論法を駆使してたちまち世紀的超俗流「原理論」を創造した稀代の天才的擬作者」という高い評価をあたえるにやぶさかではなかったことであろう。

るのである。……ところで，資本―利子という定式は，たしかに資本の最も無概念的な定式ではあるが，とにかくそれは資本の一つの定式である。だが，いったいどうして土地は，ある価値を，すなわち，ある社会的に規定された量の労働を，しかもそれ自身の生産物のなかの，地代を形成する特殊な部分を，つくりだすのだろうか？　土地は，たとえば，一つの使用価値であり物質的生産物である小麦を生産するときに生産要因として働いている。しかし，土地は小麦価値の生産とはなんの関係もない。……」(ibid. S. 824. 訳1046ページ，傍点―マルクス)。

以上のように，三位一体的定式そのものを説明したのち，マルクスは，批判の鋒先（ほこさき）を俗流経済学＝官許経済学に向けてくる。

「俗流経済学は，ブルジョア的生産関係にとらわれたこの生産の当事者たちの諸観念を教義的に通訳し体系化し弁護論化することのほかには，実際にはなにもしないのである。だから，経済的諸関係の疎外された現象形態，そこではこの諸関係が一見してばかげたものであり完全な矛盾であるような現象形態――そしてもし事物の現象形態と本質とが直接に一致するものならばおよそ科学（Wissenschaft）は余計なものであろう――，まさにこのような現象形態のもとでこそ俗流経済学はまったくわが家にある思いがするのだとしても，そしてまたこの諸関係の内的関連がおおい隠されていればいるほど，といってもこの諸関係が通常の観念にとってはなじみやすくなっていればいるほど，ますますそれは俗流経済学にとって自明に見えるとしても，そんなことはわれわれにとっては驚くにはあたらないのである。それだからこそ，俗流経済学は，自分が出発点としている三位一体，すなわち，土地―地代，資本―利子，労働―労賃または労働の価格，という三位一体が三つの一見して明らかに不可能な組合せだということには，少しも気がつかないのである。……」(ibid. S. 825. 訳1047-1048ページ，傍点―山本)。

マルクスは，三位一体的定式そのものを批判するだけではなく，このような完全に誤った定式がなぜ必然的に生まれるようになったかという，その根拠について，この章の後半で詳細かつ的確に解明しているのであり，この解明はきわめて重要な意義をもつものであるが，紙数の制限を考慮して，これについて立ちいることは，残念ながら，さしひかえることにしなければならない。しかしその美事な解明から当然に導きだされる，その解明に直接つづいて述べられているいわば結論的叙述は，「正しい批判はいかにあるべきか」ということを模範的に示していると同時に，そこには，マルクスの「経済学批判」体系のうちの圧巻ともいうべきみごとな総括が金文字をもって綴られているので，いささか長きにすぎるうらみはあるが，これを引用してかかげ，マルクスにおける「経済が批判」の考察の結びにかえることにしたいとおもう。

「資本―利潤，またはより適切には資本―利子，土地―地代，労働―労賃では，すなわち価値および富一般の諸成分とその諸源泉との関係としてのこの経済的三位一体では，資本主義的生産様式の神秘化，社会的諸関係の物化，物質的生産諸関係とその歴史的社会的規定性との直接的合生が完成されている。それは魔法にかけられ転倒され逆立ちした世界であって，そこで

は Monsieur le Capital と Madame la Terre が社会的な登場人物として，また同時に直接的にはただの物として怪しい振舞をするのである。このような間違った外観と偽瞞，このような富のいろいろな社会的要素の相互間の独立化と骨化，このような，物の人格化と生産関係の物化，このような日常生活の宗教，およそこのようなものを解消させたということは，古典学派経済学の大きな功績である。というのは，古典学派経済学は，利子を利潤の一部分に還元し，地代を平均利潤を越える超過分に還元して，この両方が剰余価値で落ち合うようにしているからであり，また，流通過程を諸形態の単なる変態として示し，そして最後に直接的生産過程で商品の価値と剰余価値とを労働に還元しているからである。それにもかかわらず，古典学派経済学の代弁者たちの最良のものでさえも，ブルジョア的立場からはやむをえないことながら，自分たちが批判的に解消させた外観の世界にやはりまだ多かれ少なかれとらわれており，したがって，みな多かれ少なかれ不徹底や中途はんぱや解決できない矛盾におちいっている。これにたいして，他方では，現実の生産当事者たちがこの資本―利子，土地―地代，労働―労賃という疎外された不合理な形態ではまったくわが家にいるような心安さをおぼえるのも，やはり当然のことである。なぜならば，まさにこれこそは，彼らがその中で動きまわっており毎日かかわりあっている外観の姿なのだからである。したがってまた，同様に当然なこととして，俗流経済学，すなわち，現実の生産当事者たちの日常的観念の教師的な多かれ少なかれ教義的な翻訳以外のなにものでもなくて，これらの観念のうちにいくらか条理のありそうな秩序をもちこんでくる俗流経済学は，まさにこの，いっさいの内的関連の消し去られている三位一体のうちに，自分の浅はかな尊大さの自然的な，いっさいの疑惑を越えた基礎を見出すのである。この定式は同時に支配的な諸階級の利益にも一致している。なぜならば，それは支配的諸階級の収入源泉の自然必然性と永遠の正当化理由とを宣言してそれを一つの教条（ドグマ）にまで高めるものだからである」(ibid. S. 838-839. 訳1063-1064ページ)。

（未完）

（1988・10・31）